

名誉顧問のコモンセンス 1

『報徳記』を読む

二律背反の解決先生 2

富か、貧か？



富か、貧か

報徳先生は、「二律背反先生」といってもいいほど、解決不可能な矛盾をはらんだ事件に遭遇します。でも、どんな矛盾に満ちた難問・課題でも、見事に解いて見せます。まさに、「二律背反解決先生」と言って良いほどです。

ここで、もう一つの「二律背反」について先生の見解をご紹介します。「貧×富」のことです。どうしてこの世に「貧者と富者」が生まれるのか、また、それをなくすにはどうすれば良いか — の問題です。

安楽自在 翁はこう言われた — 「富と貧とは、もとは遠く隔たっているものではない。ただ少しの隔たりである。その本源はただ一つの心得にある。貧者は昨日のために今日勤め、昨年のために今年勤める。それゆえ終身苦しんでその功はない。富者は、明日のために今日勤め、来年のために今年勤め、安楽自在 で、なすことはことごとく成功しないということはない。それを世の人は、今日飲む酒がなければ借りて飲み、今日食う米がないときは、また借りて食う。これが貧窮する原因である。今日薪を取って明朝飯をたき、今

夜縄(なわ)をなつて明日垣根を結べば、安心で、支障も生じない。それを、貧者の仕方は、明日取る薪(まき)で今夕の飯をたこうとし、明夜なう縄で今日垣根を結ぼうとするようなものだから、苦しんで功がないのだ。【『二宮翁夜話』19頁】

「人間は、明日のために今日働くのが良い。そうすれば、安楽自在で家も富む」と先生は言います。その反対に、「今日食べる米がないと借りて炊くのではいつまでたっても貧しいままだ」。

そこで更に先生は言います — 「人に頼らないで、自ら一人で先んじてするのがいい。これが、日本の国が開けるときからしてきたことだ」。

開闢元始の大道によって努力

卑怯・卑劣の心なし それゆえ私は常にこう言っているのだ。貧者が草を刈ろうとするとき鎌がなければ、それを隣家から借りて草を刈るのは普通のことだ。これは貧窮を免れることのできない原因である。鎌がなければ、まず日傭取り(ひょうとり:日稼ぎ)をするがよい。その賃銭で買い求め、そののちに草を刈るべきだ。この道はすなわち開闢元始(かいびゃくげんし:日本の国の始まり)の大道に基づくものであるから、卑怯(ひきょう)・卑劣の心がない。これは、神代の昔、豊葦原(とよあしはら:神意によって稲が豊かに実り栄える国の意で日本国の美称)に天降り(あまくだり)されたときの神の御心である。それゆえ、この心のある者は富貴を得、この心のない者は富貴を得ることができない。

貧富の差は、「明日のことを今日勤めること」で解消し、最後には安楽自在になるのです。なんて簡単なことでしょうか。報徳先生、ありがとうございます。

さて、ここで述べられている「我が国の開闢元始の大道に基づくもの」とは、これも報徳先生の自論で、先生の口からなんども出てきます。

悟道の極意 さてこの地に来て、いかにしようかと熟考するに、わが国開闢(かいびゃく)の昔は、外国より資本を借りて開いたのではない、わが国はわが国の恩恵で開いたに相違ないことに気がついてから、本藩(小田原藩)の下付金を謝絶し、近郷の財産家に借金を頼まず、この四千石の地の外は海外と見なし、自分が神代の昔に豊葦原(とよあしはら)へ天から降り立たと決心をし、皇国は皇国の恩恵で開く道こそ、天照大神が足跡だと思い定めて、一途に **開闢元始の大道によって努力** したのである。開闢の昔、**豊葦原に一人天から降り立たと覚悟する** ときは、流水に潔身(みそぎ)をしたように、潔いこと限りがない。何事をするにも、この覚悟をきめれば、依頼心もなく、卑怯・卑劣の心もなく、羨(うらや)ましいこともなく、心の中が清浄であるから、願うことは成就しないことがなくなるのだ。**この覚悟が事をなす根本** であり、私の悟道の極意である。この覚悟が定まれば、衰村を起こすのも、廃家を復興するのも、いとやすいことだ。ただこの覚悟一つだ。

【『二宮翁夜話』127頁】

困ったときに先生は一人だったのです。だれも助けくれません。先生は、そんな人たちを、怨んだり、羨んだり、呪ったりはしません。みんな、自分たちが生きるだけで精いっぱいだったのですから。先生は、そんなとき、豊葦原に一人、天から降り立たと覚悟したのです。これも、苦しいときの体験から生まれた覚悟です。このだれもない日本の大地に最初にやってきた人たちのように、「他人(ひと)を頼まず、この世に自分しか居ないと思って努力せよ。他人のせいにするな」 — これが、安楽自在に生きる一つの方法なのです。この孤独感は、若い先生にとって、実際はつらかったことでしょう。

【2025/03/23 都築正道】